

ガーナ共和国  
国際寄生虫対策西アフリカセンター  
プロジェクト  
中間評価調査報告書

平成19年3月  
(2007年)

独立行政法人国際協力機構  
人間開発部

## 序 文

国際寄生虫対策西アフリカセンタープロジェクトは、国際寄生虫対策イニシアティブを具体化すべく、西アフリカ地域での寄生虫対策分野における人材育成と情報ネットワークの拠点として、ガーナ大学野口記念医学研究所に、国際寄生虫対策西アフリカセンター（West African Centre for International Parasite Control : WACIPAC）を設置し、学校保健を通じた寄生虫対策活動、研修及びワークショップの開催、情報ネットワークの構築等を行う技術協力プロジェクトとして、2004年1月から5年間の協力期間をもって実施中です。

本調査団は、プロジェクト開始から約3年の成果及び問題点を確認したうえで、評価5項目の観点からプロジェクトを評価するとともに、今後のプロジェクトの方向性について、ガーナ側と協議、合意することを目的として派遣されました。

本報告書は、上記調査の結果を取りまとめたものです。

ここに本調査にご協力を賜りました関係各位に謝意を表します。

平成 19 年 3 月

独立行政法人国際協力機構  
人間開発部長 菊地 文夫

# 目 次

序 文

略語一覧

評価調査結果要約表

地 図

写 真

第1章 中間評価調査の概要	1
1-1 調査団派遣の経緯と目的	1
1-2 調査団の構成と調査期間	1
1-3 主要面談者	2
第2章 中間評価の方法	4
2-1 主な調査項目と情報・データ収集方法	4
第3章 調査結果	5
3-1 現地調査結果	5
3-2 プロジェクトの実績	8
3-3 プロジェクトの実施プロセス	12
第4章 評価結果	13
4-1 評価5項目の評価結果	13
4-2 結 論	16
第5章 提言と教訓	17
5-1 提 言	17
5-2 教 訓	17
第6章 団長所感	18
付属資料	
1. 中間評価調査協議議事録 (M/M) (合同評価レポート付)	21
2. 評価グリッド	83
3. モデル活動評価報告書 (2005年12月作成)	93

## 略 語 一 覧

略語	正式名	日本語
ACIPAC	Asian Centre of International Parasite Control	国際寄生虫対策アジアセンター
CIPAC	Centre for International Parasite Control	国際寄生虫対策センター
C/P	Counterpart	カウンターパート（相手国実施機関の協力相手）
DANIDA	Danish International Development Agency	デンマーク国際開発庁
ESACIPAC	Eastern and Southern African Centre of International Parasite Control	国際寄生虫対策東南アフリカセンター
GES	Ghana Education Service	ガーナ教育サービス
GHS	Ghana Health Service	ガーナ保健サービス
GIS	Geographic Information System	地理情報システム
GPCI	Global Parasite Control Initiative	国際寄生虫対策イニシアティブ
IEC	Information, Education and Communication	情報・教育・コミュニケーション
JCC	Joint Coordination Committee	合同調整委員会
JFY	Japanese Fiscal Year	日本の予算年度
JICA	Japan International Cooperation Agency	国際協力機構
JOCV	Japan Overseas Cooperation Volunteer	青年海外協力隊
MM	Man Month	人月
NGO	Non-Governmental Organisation	非政府組織
NMIMR	Noguchi Memorial Institute for Medical Research	野口記念医学研究所
NTD	Neglected Tropical Disease	顧みられない熱帯病
ODA	Official Development Assistance	政府開発援助
PCA	Parasite Control Association	寄生虫対策協会
PCM	Project Cycle Management	プロジェクト・サイクル・マネジメント
PDM	Project Design Matrix	プロジェクト・デザイン・マトリックス
PTA	Parents and Teachers Association	父母教師会
R/D	Record of Discussion	討議議事録
SHEP	School Health Education Programme	学校保健教育プログラム
STH	Soil Transmitted Helminthiasis	土壌伝播寄生虫症
UNICEF	United Nations International Children Education Fund	国際連合児童基金
USAID	United States Agency for International Development	米国国際開発庁
WACIPAC	West African Centre for International Parasite Control	国際寄生虫対策西アフリカセンター
WHO	World Health Organisation	世界保健機関

## 評価調査結果要約表

1. 案件の概要	
国名：ガーナ共和国	案件名：国際寄生虫対策西アフリカセンタープロジェクト
分野：保健医療	援助形態：技術協力プロジェクト
所轄部署：人間開発部第四グループ 感染症対策チーム	協力金額（評価時点）：427 百万円
協力期間 2004 年 1 月 1 日 ～2008 年 12 月 31 日	先方関係機関：ガーナ大学野口記念医学研究所（野口研：NMIMR）、保健省、教育省
	日本側協力機関：慶應義塾大学、長崎大学、東京医科歯科大学、厚生労働省、国際医療センター、日本寄生虫予防会
	他の関連協力：過去 24 年にわたる野口研への技術協力及び無償資金協力
1-1 協力の背景と概要	
<p>(1) 西アフリカにおける寄生虫感染症の現状</p> <p>西アフリカはマラリアをはじめとする各種寄生虫感染症の浸淫地帯である。マラリアは全世界で毎年 4 億人が感染し 200 万人が死亡しているが、西アフリカの住民でマラリアにかかったことのない者はまずいないといわれている。また西アフリカに特有な寄生虫感染症として、メジナ虫症、オンコセルカ症などがあり、各国でそれぞれ個別のコントロールプログラムが実施されている。回虫などの腸管寄生虫と住血吸虫は途上国を中心に世界中で 20 億人が感染しており、内訳は、回虫に感染している人口が 14 億 5 千万人、住血吸虫に感染している人口が 2 億人等と推定されているが、西アフリカも例外ではなく、就学児童を中心に高い罹患率が報告されている。重度の腸管寄生虫感染が持続すると、貧血・栄養失調から学習能力の低下が認められるといわれており、すべての学童に対する便検査と駆虫の実施は教育セクターにおける重要な課題である。しかし、これまでの各国の寄生虫対策は、主に保健セクターによる寄生虫ごとの縦割りプログラムであり、教育セクターとの連携はほとんどなされておらず、そのための人的資源と情報が不足しているのが現状である。</p>	
<p>(2) G8 サミット</p> <p>1997 年の G8 デンバーサミットにおいて、当時日本の首相であった橋本元総理は G8 先進国に対して国際的な寄生虫対策の必要性を訴え、続く 1998 年のバーミンガムサミットで「21 世紀における国際寄生虫対策」と題した報告書を提出し、日本が腸管寄生虫制圧に成功した経験をもとに、途上国における寄生虫対策に貢献する意志を表明した。これを受けて、日本政府はタイ・ケニア・ガーナに国際寄生虫対策センターを設立する方針を固め、JICA の技術協力プロジェクトとして、2000 年にタイのマヒドン大学において国際寄生虫対策アジアセンター（Asian Centre of International Parasite Control：ACIPAC）を、2001 年にケニア中央医学研究所において国際寄生虫対策東南アフリカセンター（Eastern and Southern Africa Centre of International Parasite Control：ESACIPAC）を設立した。</p>	

### (3) 野口記念医学研究所

ガーナにおいて野口記念医学研究所 (Noguchi Memorial Institute for Medical Research : NMIMR/以下、「野口研」と記す) が、本イニシアティブの西アフリカ拠点として選ばれたのは、これまでの 24 年間にわたる JICA の技術協力により研究機関としての野口研が十分な能力を持つようになり、なおかつ野口研全体で「行政 (対策活動) と研究のギャップをどのように埋めるか」という点について保健省との関係強化に努めていたためである。また、同研究所がガーナ大学の下部組織であることから教育省との関連もあり、教育行政・保健行政・研究所の三者協力体制を構築し、寄生虫対策のモデルを作るうえで適任であったこともあげられる。しかし、野口研においては、1999 年から 2003 年までの感染症対策プロジェクトがすでに実施されていたため、国際寄生虫対策のためには 2001 年から別途、第三国研修スキームを用いた国際研修を行いつつ、2002 年より同プロジェクトに国際寄生虫対策を組み入れて活動を行っていた。

### (4) 国際寄生虫対策西アフリカセンタープロジェクト

2003 年末に感染症対策プロジェクトが終了するにあたり、西アフリカにおける寄生虫対策はまだ端緒についたばかりであることから、引き続き周辺国において、学校保健をエントリーポイントとした寄生虫対策に関係する様々なレベル (政策決定者、関係部局管理者、現場技術者等) の人材の育成及び情報ネットワーク構築を目的とするプロジェクトの実施を決定した。

## 1-2 協力内容

### (1) 上位目標

国際寄生虫対策西アフリカセンター (West African Centre for International Parasite Control : WACIPAC) での人材養成により、WACIPAC 周辺国において寄生虫対策プログラムが実施される。

### (2) プロジェクト目標

WACIPAC が西アフリカにおいて包括的な寄生虫対策のための人材養成機関としての役割を担う。

### (3) 成果 (アウトプット)

1. WACIPAC の設立
2. 学校保健をベースにした寄生虫対策のためのモデルプロジェクトの設立
3. 西アフリカにおける学校保健をベースにした寄生虫対策のための人材養成
4. 西アフリカ寄生虫対策ネットワークの形成
5. 学校保健をベースにした寄生虫対策の推進
6. 西アフリカ周辺国における学校保健をベースにした寄生虫対策実施のための支援

### (4) 投入 (評価時)

#### 1) 日本側 :

長期専門家派遣	6 名	機材供与	34,252 千円
短期専門家派遣	13 名	ローカルコスト負担	100,415 千円
研修員受入れ	8 名		

2) 相手国側：			
	カウンターパート配置	23名	
	ローカルコスト負担	WACIPAC 専用の予算は割り振られていないが、水道光熱費については野口研によって負担されている。	
	土地施設提供	事務所・研修施設	
2. 評価調査団の概要			
調査者	総括／寄生虫対策	竹内 勤	慶應義塾大学医学部熱帯医学寄生虫学教室教授
	副総括	上田 直子	JICA 人間開発部第四グループ感染症対策チーム長
	評価計画	瀧本 康平	JICA 人間開発部第四グループ感染症対策チーム職員
	評価分析	関口 正也	(株) パシフィックコンサルタンツインターナショナル 総合開発事業部プランニング部
調査期間	2007年2月13日～3月5日	評価種類	中間評価
3. 調査結果の概要			
3-1 実績の確認			
(1) プロジェクト目標の達成度			
<p>学校保健をベースとした寄生虫対策のための人材育成機関として、WACIPAC は国際研修実施や周辺国支援の経験から着実に力をつけてきている。プロジェクト目標達成のためには、残りの実施期間、フィールドリサーチや研修の運営実施能力をさらに高めていく必要がある。</p>			
(2) 成果の達成度			
1) 成果1 「WACIPAC の設立」			
<p>プロジェクト開始に伴い WACIPAC が設立され、十分な数ではないもののカウンターパートも配置された。JCC に加え、タスクフォース会議もカウンターパートのオーナーシップにより開催されてきた。ただし、評価時点では WACIPAC の組織運営能力及び組織的な位置づけについては不十分であり、更なる組織強化とガーナ大学の一機関として公式に認知される必要がある。</p>			
2) 成果2 「学校保健をベースにした寄生虫対策のためのモデルプロジェクトの設立」			
<p>ダンメ・イースト郡においてモデルサイト事業が開始され、学校保健のための教師育成、教材開発、駆虫が行われるとともに、コミュニティ側の窓口となる寄生虫対策委員会 (Parasite Control Association : PCA) も設立され、郡レベルの教育局、保健局、郡議会とも連携しながら、予防活動を行ってきた。しかしながら、2005年12月の運営指導調査でも指摘されているとおり、モデルサイトでの活動は国際研修や論文発表などで引用するには科学的根拠が乏しく、フィールドリサーチとして真にモデルとなりうるものに軌道修正する必要があると認められる。</p>			
3) 成果3 「西アフリカにおける学校保健をベースにした寄生虫対策のための人材養成」			
<p>これまでポリシーメーカー向け国際ワークショップが1回 (22名参加)、学校保健にかかわるプロジェクトマネージャー向け国際研修が3回 (57名参加) 実施された。研修は当初計画どおり実施され、研修参加者の研修への評価も高いことが研修後のアンケート調査からも確認できる。また、学校保健の前線で活動する関係者向けの国際研修は本プロジェクトの中では実施しないことが決められたものの、実質的には支援国における国</p>			

内研修において一部対応できている。特に、ニジェールにおいては前線で活動する者を含む 29 人が WACIPAC の支援による研修を受けた。

#### 4) 成果 4 「西アフリカ寄生虫対策ネットワークの形成」

インターネットによる情報交換を目的として、2005 年 1 月に WACIPAC のホームページが開設された。しかしながら、限られた人的資源の問題もあり更新作業やコンテンツの増強などはなされておらず、実質的には機能していない。評価時点においては、こうした問題を改善するため、ホームページの全面改訂とフランス語版が準備されている状態である。

#### 5) 成果 5 「西アフリカ地域及び CIPACs 間における学校保健をベースにした寄生虫対策の推進」

国際研修における ACIPAC からの講師派遣にかかわる協力や、周辺国への訪問、援助調整、ニュースレターの定期刊行などが実施されてきた。ただし、この成果は成果 4 や成果 6 と重複する部分が多く、PDM 改訂においてそれぞれへ統合する必要性が確認された。

#### 6) 成果 6 「西アフリカ周辺国における学校保健をベースにした寄生虫対策実施のための支援」

国際研修の成果もあり、周辺国における支援プロジェクトの提案書が 6 カ国（ベナン、ニジェール、セネガル、ナイジェリア、ブルキナファソ、マリ）から提出され、精査した結果、ベニン、ニジェールの 2 カ国において周辺国支援が開始された。ベナンでは 2006 年 9 月にプロジェクトが開始され、教材開発、教員訓練、駆虫にかかわる技術支援が WACIPAC により提供された。また、ニジェールでは 2007 年 2 月に国内研修が WACIPAC の支援により実施された。なお、本プロジェクトの支援対象国はガーナを含む 10 カ国であるが、国際研修に参加しているすべての国においてプロジェクト支援を行うことは WACIPAC の現存の能力と残りのプロジェクト期間では困難であることが確認された。このため、ガーナにおける国家駆虫プログラムや顧みられない熱帯病プログラムへの WACIPAC の協力についても周辺国支援の一環として含め、合計 3 カ国（ガーナ、ニジェール、ベナン）において集中的に支援を継続することが現実的であると確認された。

### (3) 実施プロセス

プロジェクトの実施プロセスには改善の余地がある。特にプロジェクト開始当初の 2 年間は、日本側、ガーナ側のモデルサイト事業にかかわる認識のギャップがあり、その解決のため、二度の運営指導調査団を派遣することとなった。また、チーフアドバイザーの交代に伴う不在期間の長期化もカウンターパートの能力強化・技術移転や国際寄生虫対策イニシアティブにおける WACIPAC の位置づけや役割にかかわる共通理解を醸成するうえで制約要因となった。しかしながら、プロジェクト活動が停滞する中でも日本人専門家とカウンターパートは状況の改善に努めてきており、中間評価の段階までには双方のギャップの多くは埋まり、プロジェクトの今後の方向性についても軌道修正がなされている。中間評価調査中における協議や参加型ワークショップによる PDM 改訂のプロセスを通じて、双方においてそのことが確認された。

## 3-2 評価結果の要約

### (1) 妥当性

本プロジェクトの妥当性は現在においても高いといえる。学校保健をベースとした寄生虫対策というアプローチは、1998 年の国際寄生虫対策イニシアティブ（橋本イニシアティ



ブ)に加え、2005年の『保健と開発』に関するイニシアティブ」や2006年の「日本の対アフリカ感染症行動計画」など日本の支援政策と合致している。また、ターゲットグループのニーズについても、土壌伝播寄生虫症や住血吸虫症の罹患率や患者数は地域差があるものの10カ国すべてにおいて高く、WACIPACによる同地域の学校保健に係る人材育成は妥当といえる。

## (2) 有効性

プロジェクト目標の達成見込みとしては、人材育成センターとしてのWACIPACの機能は、国際研修参加者の高い満足度からみてもわかるように相当強化されてきており、プロジェクト目標の達成見込みはある。今後の課題としては、カウンターパートのフィールドリサーチや研修にかかわる能力が強化され、WACIPACが提供する国際研修の研修モジュールが確立すれば、人材育成機関としての機能がさらに強化されると考えられる。また、対象10カ国のうち、ベナン、ニジェール、ガーナにおいて、国際研修参加者が実施する当該国への寄生虫対策事業及び学校保健プログラムに対する技術的支援を開始しており、成果を上げ始めており、研修後のフォロー体制も構築されつつある。

外部要因については、日本以外の財源については、特に周辺国支援を実施するにあたって非常に重要な要因である。しかしながら、プロジェクトとしては、ドナー連携会議を開催することにより、他ドナーからの支援を呼びかけ、外部要因を内部化する努力がなされている。

## (3) 効率性

効率性については過去の運営上の問題をかんがみると改善の余地がある。成果の達成状況は国際研修を除くと総じて当初計画よりも遅れている。日本側のインプットについては、チーフアドバイザーの不在期間が長いことが懸念される。しかしながら、それらを補うべく、短期専門家派遣やタイACIPACからの技術支援により活動の停滞を最小限に食い止める努力がなされている。他の専門家投入については適切であった。機材についてもおおむね問題なく活用されている。ガーナ側のインプットについては、カウンターパートは、他業務で相当多忙な中でもWACIPAC活動に非常に熱心に取り組んでいる。ただ、フルタイムでWACIPAC活動にかかわるカウンターパートはおらず、プロジェクト活動を迅速に進めるうえでの制約要因となっている。なお、ニジェールへ渡航する際、安全面の理由からアビジャンを経由できず、ヨーロッパ経由となるため、時間及びコストが過剰にかかっている点も効率性に影響している。

## (4) インパクト

これまでの活動から正のインパクトが確認された。ガーナ国家駆虫プログラムの開始にあたって学校保健教育プログラム(School Health Education Programme: SHEP)からWACIPACに対してプログラム実施にかかる技術支援の依頼があり、WACIPACからは教師研修教材作成にかかる技術的な支援、ステークホルダー会議開催支援、WACIPACモデルサイトにおける研修手法の提示、全国の教師研修への講師派遣等の支援を実施してきた。これは、WACIPACがガーナ国内においてリソースセンターとして認知されている証である。さらに、2007年4月から開始予定の顧みられない熱帯病プログラムに関するWACIPACは技術支援団体となる予定である。

また、2004年のポリシーメーカーワークショップに参加したベナンの研究者が、学校保健を通じた寄生虫対策にかかる重要性を認識し、その後保健大臣になっている。同大臣の

イニシアティブにより、2006年には学校保健政策ペーパーが策定されている。  
負のインパクトについては、これまでのところ確認されていない。

#### (5) 自立発展性

野口研は WACIPAC を西アフリカにける寄生虫対策のための人材開発拠点と認識しており、フィラリア研究センターと統合した形でガーナ大学の一つの研究センターとして正式に組織化することを検討している。これが実現すれば、予算、人員ともに正式に確保されることになり自立発展への大きな一歩となる。しかしながら、WACIPAC の本来機能を果たすために十分な予算や人員が確保できるか否かは現時点では不明であり、今後も注視していく必要がある。

また、技術面においては、国際研修では研修受講者から高い満足度を得られる内容を提供してきており、野口研の講師としての高い技術力が認められる。しかしながら、コース運営のロジスティックスにかかる体制は WACIPAC プロジェクト事務局が実施している状況であるため、野口研の事務局からの関与が必要である。

### 3-3 効果発現に起因した要因

#### (1) 計画内容に関すること

国際寄生虫対策センター (Centre for International Parasite Control : CIPACs) 間での連携促進は、ACIPAC の経験を WACIPAC の国際研修に活かすうえで有益であった。

#### (2) 実施プロセスに関すること

周辺国支援 (ガーナ国内含む) による日本人専門家やカウンターパートによる技術支援は、ドナー協調など本プロジェクトの他ドナーからの財政支援という外部要因を内部化するうえで貢献している。

### 3-4 問題点及び問題を引き起こした要因

#### (1) 計画内容に関すること

当初の PDM 及び PDM (ver.2) は非常に複雑である一方、指標が不明確であり、関係者がプロジェクトの全体像や達成目標を把握するうえで障害となった。

#### (2) 実施プロセスに関すること

日本側、ガーナ側双方におけるモデルサイト事業にかかわる認識のギャップと、チーフアドバイザーの不在、フルタイムのカウンターパートが配置できないという不十分な人的投入はプロジェクトの運営上問題となる可能性が高いため、今後改善が望まれる。

### 3-5 結 論

プロジェクトは過去に運営上困難な状況に直面したこともあったが、適切な軌道修正の努力も行われてきた。日本側、ガーナ側双方が WACIPAC の将来像 (西アフリカ地域における学校保健による寄生虫対策の人材育成拠点) を共有し、残りの実施期間、人材を含む適切な資源を活動に投入することができれば、プロジェクト目標は達成されることが予測される。

### 3-6 提 言

(1) 2008年6月の終了時評価を見据え、今回改定された PDM (ver.3) に基づいて適切なモニタリングを実施する必要がある。

- (2) 現在は、WACIPAC にフルタイムのカウンターパートが存在しない状況であるため、WACIPAC の活動を継続して行うために必要な数のカウンターパートを配置するための一層の努力が必要となる。
- (3) WACIPAC の自立発展性確保のためにも、WACIPAC がガーナ大学の一機関として早期に承認されることが期待される。
- (4) モデルサイト活動は、実証可能な科学的な研究計画に基づいたフィールドリサーチとして実施されるべきである。
- (5) 支援対象国において出てきている有益な成果については、グッドプラクティスとしてまとめることが期待される。

### 3-7 教訓

- (1) WACIPAC の展望や役割・責任について、日本側、ガーナ側双方における明確な理解が不十分だったことがプロジェクト運営上の問題の原因として考えられる。こうした問題が生じた際には迅速に適切な対応がなされるべきである。
- (2) WACIPAC と ACIPAC との連携は南南協力の有効性を証明した。
- (3) WACIPAC による支援対象国でのドナー協調や政策的枠組みの策定支援は、学校保健をもととした寄生虫対策が有効であることを示した。
- (4) ガーナ周辺国への協力を可能にするためには、事務手続きや実施体制の整備を前もって行う必要がある。

### 3-8 今後の評価計画（終了時評価の実施時期）

終了前（2008年6月）及び終了後（2013年頃）に評価を実施予定。

## 4. PDM 改訂

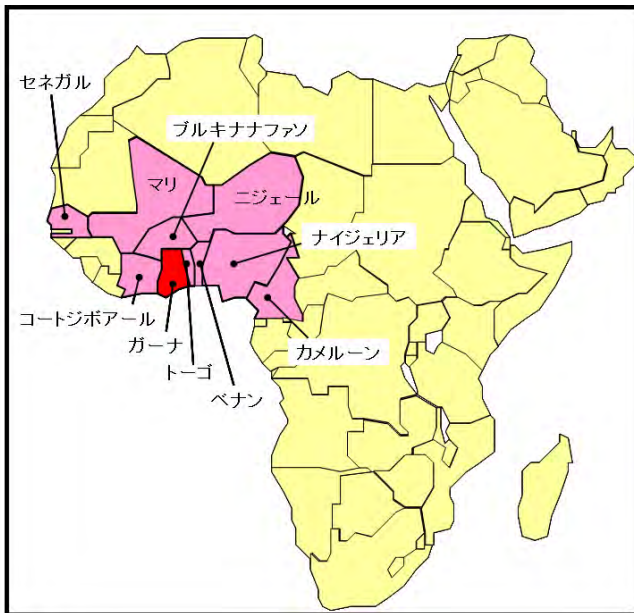
### 4-1 PDM (ver.3) の概要

- (1) 上位目標
 

WACIPAC での人材養成により、WACIPAC メンバー国において寄生虫対策プログラムが実施される。
- (2) プロジェクト目標
 

WACIPAC が西アフリカ地域のメンバー国の統合的な寄生虫対策のための人材養成機関としての役割を担う。
- (3) 成果
  1. WACIPAC の組織能力が強化される。
  2. ガーナ国内におけるフィールドリサーチを通じて学校保健による寄生虫対策のモデルが開発される。
  3. 国際研修及びフォローアップを通じてメンバー国のポリシーメーカー、プログラムマネージャーが学校保健による寄生虫対策の知識や技術を獲得する。
  4. WACIPAC がメンバー国及びCIPACs間の情報ネットワークの核としての機能を果たす。
  5. 重点支援国が寄生虫対策のための学校保健活動を開始する。

## プロジェクトのメンバー国



※西アフリカ地域 10 カ国

ベナン、ブルキナファソ、カメルーン  
コートジボアール、ガーナ、マリ  
セネガル、トーゴ







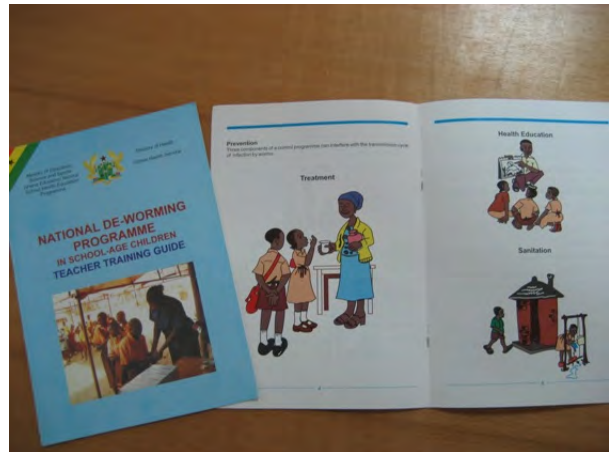
WACIPAC（国際寄生虫対策西アフリカセンター）  
の全景



保健担当教師が自ら作成した保健教材を  
使ってデモンストレーションする様子



アダフォ地区ヘルスセンターのラボラトリー



プロジェクトの支援により作成された  
国家駆虫マニュアル



アダフォ地区コミュニティ関係者との協議



合同調整委員会での調査結果発表の様子

## 第1章 中間評価調査の概要

### 1-1 調査団派遣の経緯と目的

国際寄生虫対策イニシアティブを具体化すべく、西アフリカ地域での寄生虫対策分野における人材育成と情報ネットワークの拠点として、ガーナ大学野口記念医学研究所（以下、「野口研」と記す）に、国際寄生虫対策西アフリカセンター（West African Centre for International Parasite Control : WACIPAC）が設置され、学校保健を通じた寄生虫対策モデルの確立、研修及びワークショップの開催、情報ネットワークの構築等を行う技術協力プロジェクトが、2004年1月から5年間で実施中である。

本調査団は、プロジェクト開始から約3年の成果及び問題点を確認したうえで、評価5項目の観点からプロジェクトを評価するとともに、今後のプロジェクトの方向性について、ガーナ共和国（以下、「ガーナ」と記す）と協議、合意することを目的とした。

### 1-2 調査団の構成と調査期間

#### (1) 調査団の構成

氏名	職務	所属
竹内 勤	総括／寄生虫対策	慶應義塾大学医学部熱帯医学寄生虫学教室教授 (国内委員長)
上田 直子	副総括	JICA 人間開発部第四グループ感染症対策チーム長
瀧本 康平	評価計画	JICA 人間開発部第四グループ感染症対策チーム 職員
関口 正也	評価分析	(株)パシフィックコンサルタンツインターナショナル総合 開発事業部プランニング部

※タイ個別専門家小林 潤（国際寄生虫対策アドバイザー）が、本調査団に合わせて出張し、本調査にかかる助言を行った。

#### (2) 調査期間

本調査の現地調査期間は、2007年2月13日（火）より3月5日（月）まで（現地滞在期間：2月14日～3月3日）であった。

日程		小林	瀧本	竹内・上田	関口
2/13	火	タイ発	日本発		
2/14	水	12:40 ガーナ着	12:40 ガーナ着		
		PM : JICA ガーナ事務所、専門家との協議			
2/15	木	野口研所長表敬、C/P との協議			
2/16	金	専門家との協議、C/P との協議			
2/17	土	資料整理			
2/18	日	専門家との協議			
2/19	月	モデルサイト調査			

2/20	火	C/P、専門家との協議	本邦発	カブール発
2/21	水	AM : C/P、専門家との協議	12:40 ガーナ着	12:40 ガーナ着
		PM : 団内打ち合わせ、在ガーナ日本大使館表敬、JICA ガーナ事務所協議		
2/22	木	AM: 野口研所長表敬、C/P、専門家との協議		
		PM: C/P、専門家との協議	教育省、保健省との協議	
2/23	金	モデルサイト調査		
2/24	土	JICA ガーナ事務所、専門家との協議		
2/25	日	団内打ち合わせ、合同評価報告書草案執筆		
2/26	月	PDM 改訂のためのワークショップ		
2/27	火	ミニッツ、合同評価報告書作成		
2/28	水	ミニッツ協議、合同評価報告書協議 23:30 : 小林ガーナ発		
3/1	木	AM : 合同調整委員会		
		PM : ミニッツ署名交換、JICA 事務所・大使館報告 23:30 竹内、上田ガーナ発		
3/2	金	タイ着	2007 年度計画策定に関する協議	2007 年度計画策定に関する協議
3/3	土		資料整理 23:30 ガーナ発	本邦着 資料整理 22:15 ガーナ発
3/4	日			
3/5	月		本邦着	本邦着

### 1-3 主要面談者

<ガーナ側>

(1) ガーナ大学

Prof. Kwesi Yankah

Pro-Vice-Chancellor

(2) 野口記念医学研究所 (Noguchi Memorial Institute for Medical Research : NMIMR)

Prof. Alexander K. Nyarko

Project Director/Director of NMIMR

Prof. Michael D. Wilson

Deputy Project Director/Deputy Director of NMIMR

Prof. Kwabena M. Bosompem

Project Manager/ Head of Parasitology Unit

Prof. Daniel A. Boakye

Senior Member

Mr. Maxwell A. Appawu

Senior Member

Dr. Irene Ayi

Senior Member

<関連省庁>

(1) ガーナ保健サービス (Ghana Health Service : GHS)

Mr. Biritium

Programme Manager/Division of Disease Control

(2) ガーナ教育サービス (Ghana Education Service : GES)

Mrs. Cynthia Bosumtwi-Sam

SHEP Director

<日本側関係者>

(1) 在ガーナ日本大使館

中村 温

参事官

(2) JICA ガーナ事務所

村上 博

所 長

若杉 裕司

所 員

(3) プロジェクト専門家

粟澤 俊樹

長期専門家 (国際寄生虫対策/公衆衛生)

小澤 真紀

長期専門家 (業務調整/周辺国支援)

(4) タイ派遣個別専門家

小林 潤

国際寄生虫対策アドバイザー



## 第2章 中間評価の方法

### 2-1 主な調査項目と情報・データの収集方法

#### (1) 主な調査項目

主要な調査項目は以下のとおり。

- 1) プロジェクト関係者との意見交換及びモデルサイト調査により、プロジェクトの進捗状況の確認と課題・問題点の把握を行う。
- 2) プロジェクト関係者との協議を通じて、現在までの活動実績、成果達成状況を確認し、計画達成度（投入実績、活動実績、プロジェクト成果の達成状況）を把握するとともに、目標と活動内容の整合性を検討する。
- 3) 上記を踏まえ、JICA 事業評価ガイドラインに沿って評価5項目の観点からプロジェクトの評価を行う。（評価5項目：妥当性、有効性、インパクト、効率性、自立発展性）
- 4) 当初計画の見直しと調整を行い、プロジェクト・デザイン・マトリックス（Project Design Matrix：PDM）改訂に関する協議及び今後の活動計画を策定する。
- 5) 特に、今後のプロジェクトの方向性についてガーナ側・日本側の共通認識を再醸成し、さらにプロジェクトの活動として「フィールドリサーチ」の実施支援を重視するという方針をガーナ側に提案する。
- 6) 一連の調査、協議を通じて双方で合意した事項についてミニッツに取りまとめる。

#### (2) 評価調査の手順

中間評価調査団は、プロジェクト・サイクル・マネジメント（Project Cycle Management：PCM）手法に基づき評価を実施した。具体的な評価の手順は以下のとおり。

- 1) 2005年12月に派遣された運営指導調査団によって改訂されたPDM（ver.2）をプロジェクトの枠組みと捉え、アウトプット及びプロジェクト目標の達成度あるいは達成の見込みに関しての評価を行う。
- 2) また、プロジェクト実施マネジメントの観点から、同PDMの現状を実績及び実施プロセスの観点から分析を行う。
- 3) さらに、評価5項目（妥当性、有効性、効率性、インパクト、自立発展性）の観点から、プロジェクトを評価・分析する。
- 4) プロジェクトに関しての提言及び教訓を抽出する。

#### (3) 情報・データの収集方法

主な情報・データの収集方法は以下のとおり。

- 1) 既存資料のレビュー
  - ・各種報告書（事前調査団報告書、運営指導調査団報告書、専門家業務完了報告書等）
  - ・プロジェクト関連資料（投入記録、活動記録等）
- 2) 日本人専門家、カウンターパートへのフォーマットを利用した活動実績自己評価調査
- 3) プロジェクト関係者（カウンターパート、日本人専門家など）へのインタビュー
- 4) モデルプロジェクト・サイト（ダンメ・イースト郡）の視察

## 第3章 調査結果

### 3-1 現地調査結果

2007年2月13日から3月3日まで現地での調査を実施した。現地調査はプロジェクトの専門家、カウンターパート、野口研、GHS、GESなどの関係者へのインタビュー調査を通じて行われた。また、モデルプロジェクトのサイトであるアダフォ地区を訪問し、モデル校見学と関係機関へのインタビュー調査を実施した。

現地調査を通じて得られた情報をもとに、プロジェクトの合同評価や今後の方向性についてガーナ側と協議し、合同評価報告書、PDM改訂、次年度以降の活動計画などについて合意を得た。合意事項はミニッツにまとめられ、3月1日に開催された合同調整委員会（Joint Coordination Committee : JCC）にて署名がなされた。

#### (1) 現地調査結果概要

プロジェクトは、これまでの3年間の活動、特に国際研修、ベナンやニジェールにおける技術支援を通じて、一定の成果を上げ、西アフリカにおける寄生虫対策の人材育成センターとしての機能が強化されつつある。「学校保健による寄生虫対策（“School health based intervention for parasite control”）」のモデル構築に向けて、フィールドにおける研究能力や研修マネジメント能力の強化を図るとともに、周辺国支援を通じて芽を出しつつある成果を当該国政府や関連ドナー等との協調のもと、一層発展させていく必要がある。

さらに、WACIPACがガーナ大学の一機関として正式に承認され、ガーナ側によって活動に必要な予算や人員の配置がある程度行われるようになれば、より自立的に活動を進めることが可能となり、WACIPACのセンターとしての機能は一層強化されると思われる。

モデルサイトでの活動に関しては、2005年12月の運営指導調査においてモデル活動の評価を行い、過剰な資金投入を正すべく軌道修正を試みたが、依然としてガーナ側と日本側の考え方に相違があった〔同モデル活動評価については付属資料3. モデル活動評価報告書（2005年12月作成）を参照のこと〕。しかしながら、今般の協議を通じて、モデル活動をフィールドリサーチとして再整理し、予算面においても上限額を設けることについて改めて合意に至ることができた。これにより、ガーナ側とモデル活動の手法・方向性について一致が得られたことは意義深いものと思われる。残り1年8か月は、モデルサイトでのフィールドリサーチを通じて科学的に検証され得るデータを取得し、その成果を論文等を通じ発表することをめざすとともに、WACIPACの中心活動である国際研修及び関係国支援を通じた人材育成活動を強化していく必要がある。

#### (2) PDM改訂

PDMの改訂にあたっては、参加型ワークショップを通じ、プロジェクトの現状及び今後の方向性を反映させるとともに、モニタリングが容易となるよう成果及び指標の精緻化、更には詳細に記述していた活動をより簡潔にした。

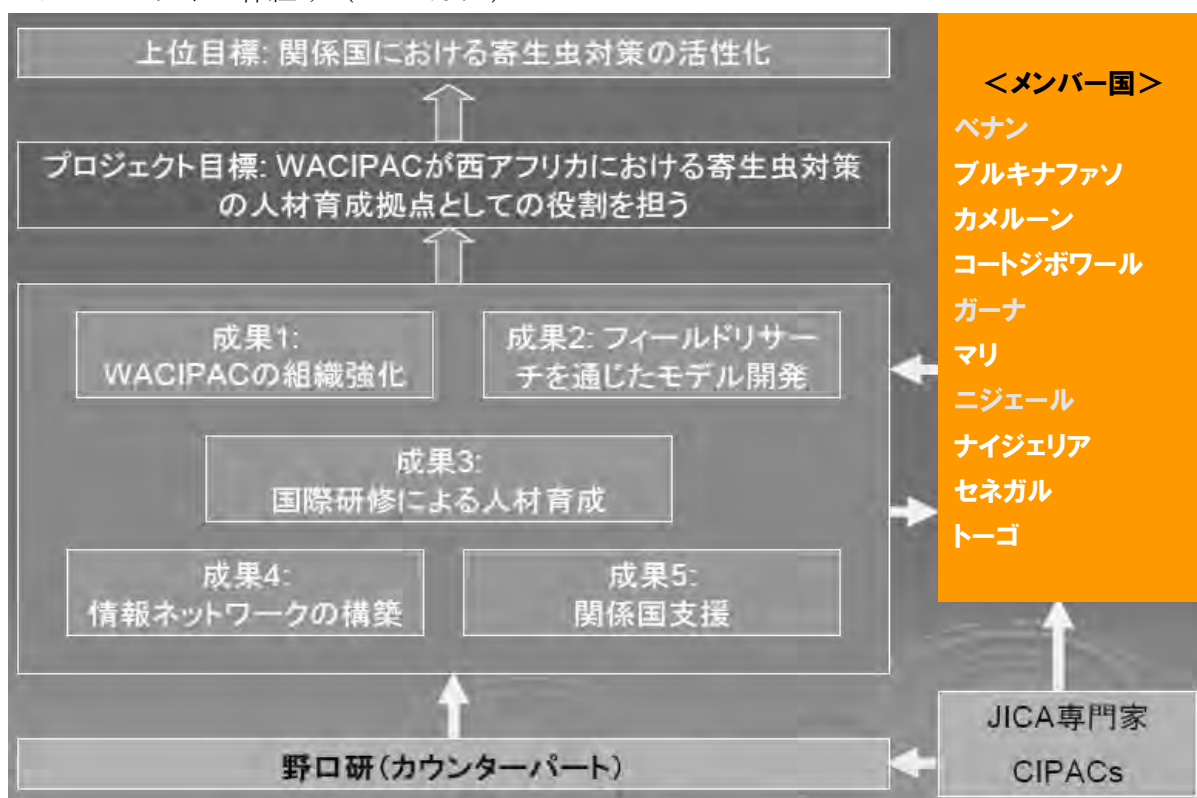
今般のPDM改訂（ver.2からver.3）の項目ごとの改訂内容は次表のとおりである。

<PDM 改訂のポイント>

項目	改訂内容
プロジェクト サイト	これまでガーナを含む周辺 10 カ国を支援国 (Supporting site) と称していたが、プロジェクト期間中にすべての国で具体的なプロジェクトを支援することは困難であることから、支援国ではなく、メンバー国 (Member Countries) と称することとした。なお、実際に具体的な支援を実施する国は支援国 (Supporting Countries) と称することとした。
対象者	現場での活動従事者 (Frontline Officer) については、国際研修で研修する計画がなくなったため、直接の受益者からは外した。
スーパーゴール	変更なし
上位目標	変更なし (ただし、支援国という文言をメンバー国に修正)
プロジェクト目標	変更なし (ただし、支援国という文言をメンバー国に修正)
成果	成果としてめざすところに大きな変化はないが、修正を行った。成果をその内容や関連する活動をかんがみ、6 つから 5 つに整理した。また、各成果の文章もより明確にした。
活動	活動については、細部まで記述が及んでおり、さらに重複しているものも散見された。このため、改訂した成果に合わせて整理した。
指標	終了時評価を見据えて指標を整理、精緻化した。具体的にはプロジェクト目標及び成果にかかわる指標とその入手手段について再設定した。
外部条件	これまでの PDM では活動レベルの外部条件が設定されていなかったため、新たにこれを設定した。
前提条件	これまでの PDM には前提条件が設定されていなかったため、新たに設定した。

次に示す図は改訂された PDM (ver.3) の概要を図化したものである。なお、PDM (ver.3) については、付属資料 1 の合同評価報告書 ANNEX II を参照されたい。

<プロジェクトの枠組み (PDM ver. 3) >



(3) 2007年度以降の計画

JCCでPDM改訂版(ver.3)及び次年度以降の活動方針が合意されたことを受け、カウンターパートとの参加型ワークショップを通じて、2007年度以降の活動計画の詳細をPDM(ver.3)に基づいて作成された活動計画(PO)に落とし込んだ。主な活動計画としては以下のものが含まれる。

1) モデル活動

2007年5月中旬までにフィールドリサーチの提案書をガーナ側が作成し、プロジェクト内の審査委員会(及び野口研内の倫理委員会)にて審査したうえで実施に移すこととする。リサーチのテーマとしては、「学校保健アプローチとコミュニティベースのアプローチの関連性の検証」、「マラリア予防教育に関する学校からコミュニティへの波及にかかる効果検証」、「寄生虫症の駆虫薬の効果検証」が挙げられている。

2) 国際研修

2007年、2008年に関係国10カ国の保健省及び教育省のプログラムマネージャーを対象とした国際研修を実施するとともに、2008年には両省の政策決定者を対象としたポリシーメーカーワークショップを計画している。

3) 関係国支援

ベナンについては、2006年度にダンボ地区において実施した駆虫や保健教育にかかる教師研修等に続き、2007年度以降はより上位の地域レベルでのトレーナー研修支援を中心に行い、他ドナーを巻き込みながら活動のスケールアップをめざす。

ニジェールについては、2007年2月にWACIPACの支援によって実施された「学校保健

活動に関するコンセンサス形成のためのセミナー」を契機として、Health Promoting School の概念に基づく自己評価シート(学校自身で改善可能な活動を促すためのチェックリスト)の導入や保健省と教育省及びその他ドナーの協調の促進を合わせて実施していく。

ガーナでは、2006年度から継続している国家駆虫プログラム、更には上記自己評価シートの作成にかかる技術支援を実施する。

その他の国については、国際研修の対象国とする以外に研修のフォローアップのための訪問を年間1、2回実施することとする。

### 3-2 プロジェクトの実績

以下に、PDM ver.2に基づいて実施された、投入、活動、成果及びプロジェクト目標達成度についての評価結果を記述する。

#### (1) 投入

##### 1) 日本側投入

##### a) 専門家

長期専門家については、2006年12月までに6人、延べ78人月が投入された。専門分野としてはチーフアドバイザー、業務調整、寄生虫対策、学校保健、広域協力が含まれる。一方の短期専門家については、同期間中に13人、延べ27人月が投入された。分野としては、寄生虫対策、学校保健、研修サイクルマネジメント、Information, Education and Communication (IEC) 開発、情報技術が含まれる。詳細については合同評価報告書のANNEX IIIを参照されたい。以上に加えて、2006年に実施された第三回国際研修においては、タイ国際寄生虫対策アジアセンター (Asian Centre of International Parasite Control : ACIPAC) より小林潤個別専門家 (国際寄生虫対策アドバイザー) とタイ保健省 Pimpimon Thongthien 職員が講師として派遣された。

##### b) 機材

現地購入及び本邦からの持込みにより、これまでに2,634,810,027 Cedi 相当の機材が投入された。各機材の価格、使用・管理状況については、合同評価報告書のANNEX IVを参照されたい。

##### c) カウンターパート研修

本邦研修のスキームを利用して、2007年2月までに8名のカウンターパートが日本での研修を受講した。本邦研修には、プライマリーヘルスケア、電子教育のためのマルチメディア技術、寄生虫対策、参加型社会開発、天然資源管理のための地理情報システム技術、臨床検査技術などの分野が含まれる。研修参加者名や研修期間などについては、合同評価報告書のANNEX Vを参照されたい。

また、JICAによる長期研修プログラムにより一人のカウンターパートが東京医科歯科大学にて、免疫学/分子生物学にかかわる博士課程で学んでいる。

これらの本邦研修に加えて、3名のカウンターパートが他のCIPACによる国際研修に参加する機会を得た。参加した国際研修は以下のとおりである。

1. ACIPAC International Training Course on School-based Malaria and STH control (2004年、タイ)

2. ESACIPAC International Training Course on School-based Parasite Control, 2004 (2004 年、ケニア)
3. ESACIPAC International Training Course on School-based Parasite Control, “Strengthening School Health and Nutrition Programmes” (2005 年、ケニア)

d) 運営コスト

プロジェクト開始以来、2006 年度第三四半期（2006 年 12 月）までに、現地業務費として 7,724,251,179 Cedi が支出された。各年度における支出額及びその内訳は合同評価報告書の ANNEX VI を参照されたい。

2) ガーナ側投入

a) カウンターパート

ガーナ側のカウンターパートにはフルタイムスタッフはいないものの、2006 年 12 月までに延べ 23 名が任命されてきた。詳細については合同評価報告書の ANNEX III を参照されたい。

b) 土地建物

討議議事録 (Record of Discussion : R/D) に基づき、野口研敷地内の WACIPAC 管理棟、モデルサイト (ダンメ・イースト郡) の GHS における検査施設 (拡張・改修工事は日本側負担)、野口研の研修施設が提供されている。

c) ローカルコスト

野口研では本プロジェクトにかかわるスタッフの給与、水道光熱費を負担しているが、野口研の他の活動と本プロジェクトの活動に分けて予算管理をしていないため、本プロジェクトにかかわる具体的な支出実績については不明である。

(2) 成果の達成度

以下に 6 つの成果の達成度の概要を示す。各成果のもとで設定された指標ごとの達成状況については、本報告書の付属資料 1 の合同評価報告書 7～13 ページに詳細に記述した。

1) 成果 1 「WACIPAC の設立」

2003 年 12 月 17 日に本プロジェクトの R/D が署名された際、WACIPAC は正式に発足し、カウンターパート及びプロジェクト補助スタッフも配置された。JCC (9 回の運営委員会と 3 回の諮問委員会) に加え、タスクフォース会議も、一部不定期な期間がありつつも定期的にカウンターパートのオーナーシップにより開催されてきた。また、国際研修についても成功裏に実施してきた。以上のことから、WACIPAC の基本的な実施システムは確立されてきたといえる。

しかしながら、ほとんどのスタッフ (特にカウンターパート) はフルタイムでプロジェクトに従事できておらず、プロジェクト運営上のマンパワーとしては十分な状況にあるとはいえない。必要なマンパワーを確保するためには、WACIPAC が正式にガーナ大学の一機関として位置づけられ、専属の人員が配置される必要がある。このため、現在野口研では、同研究所の有するプロジェクトである「アフリカリンパフィラリア支援センター」と WACIPAC を統合する形で、大学のひとつのセンターとするべく企画書を準備している。

2) 成果 2 「学校保健をベースにした寄生虫対策のためのモデルプロジェクトの設立」

首都アクラより東へ 100km 程度行ったダンメ・イースト郡においてモデルサイト事業が

開始された。これまでに WACIPAC はアダフォ地区及びビッグ・アダ地区におけるベースライン調査を実施し、コミュニティ組織である寄生虫対策協会（Parasite Control Association : PCA）の設立を支援した。さらに、対象のモデル校及びコミュニティにおいて、保健教育に従事する教員の訓練、IEC 教材開発を含む駆虫活動も実施した。

今回調査で訪問したアダフォ地区での PCA 活動は活発であり、郡レベルの GHS、GES/SHEP（学校保健教育プログラム：School Health Education Programme）、郡議会とも連携しながら、ラジオ・アダ（地方 FM 放送局）やタクシー運転手組合を活用するなど予防・啓発活動を行ってきた。また、モデル校についても、WACIPAC による教員訓練を通じて、寄生虫の駆虫を含む学校保健にかかわる能力を強化してきている。さらに、教員訓練の前にも、SHEP の郡調整員、研修担当者、巡回監視員は駆虫、保健教育、健康推進学校にかかわる WACIPAC の 3 回のワークショップに出席した。

2005 年 12 月に派遣された運営指導調査では、PCA 活動について評価を行い、対象地域における学校保健による寄生虫対策の成果を確認したものの、モデルサイトでの活動は国際研修や論文発表などで引用するには科学的根拠が乏しく、フィールドリサーチとして真にモデルとなりうるものに軌道修正する必要性を指摘した。これを受けて、PCA 活動に対するプロジェクトからの投入は停止し、その活動も停滞した。投入を停止せざるを得なかった理由としては、PCA 活動にかかわる投入経費が他の活動の支障を来すほど増加したことが指摘されているが、これは当初の PDM の活動内容や指標が関係者間で正しく共有されていなかったことに起因する。

### 3) 成果 3 「西アフリカにおける学校保健をベースにした寄生虫対策のための人材養成」

これまでポリシーメーカー向け国際ワークショップが 1 回（22 名参加）、学校保健にかかわるプロジェクトマネージャー向け国際研修が 3 回（57 名参加）実施された。研修は当初計画どおり実施され、研修参加者の研修への評価も高いことが研修後のアンケート調査からも確認できる。研修参加者は、研修を通じて大いに動機づけられ、学校保健による寄生虫対策にかかわる知識や技術を習得することができた。また、学校保健の前線で活動する関係者向けの国際研修は本プロジェクトの中では実施しないことが決められたものの、実質的には支援国における国内研修において一部対応できている。特に、ニジェールにおいては前線で活動する者を含む 29 人が WACIPAC の支援による研修を受けた。

しかしながら、成果 2 に関連するモデルサイト事業については、国際研修における視察先にはなっているものの、その経験や成果を研修カリキュラムに統合するには至っていない。モデルサイトにおける学校からコミュニティへのアプローチについては、最終年度となる 2008 年の国際研修において検証された結果が紹介されることが期待されている。

なお、成果 3 に関連する活動や指標の一部は学校保健の前線で活動する関係者向けの国際研修が実施されないことになったことから見直されるべきである。

### 4) 成果 4 「西アフリカ寄生虫対策ネットワークの形成」

インターネットによる国際研修参加者、日本人専門家、ガーナ側カウンターパート、CIPACs 関係者、国際機関関係者間の情報交換を目的として、2005 年 1 月に WACIPAC のホームページが開設された。しかしながら、限られた人的資源の問題もあり更新作業やコンテンツの増強などはされておらず、開設以来の 1 日平均アクセス数は 17.5 回と少なく、実質的には機能していない。評価時点においては、こうした問題を改善するため、ホーム

ページの全面改訂とフランス語版が準備されていた。

5) 成果 5 「西アフリカ地域及び CIPACs 間における学校保健をベースにした寄生虫対策の推進」

国際研修における ACIPAC からの講師派遣にかかわる協力や、周辺国 9 カ国への訪問、援助調整、ニュースレターの定期刊行などが実施されてきた。ただし、当該成果にかかわる活動は成果 4 や成果 6 のそれらと重複する部分が多く、PDM 改訂においてそれぞれへ統合する必要性が確認された。

6) 成果 6 「西アフリカ周辺国における学校保健をベースにした寄生虫対策実施のための支援」

国際研修の成果もあり、周辺国における支援プロジェクトの提案書が 6 カ国（ベナン、ニジェール、セネガル、ナイジェリア、ブルキナファソ、マリ）から提出され、精査した結果、ベナン、ニジェールの 2 カ国において周辺国支援が開始された。

ベナンでは、2006 年 9 月にダンボ地区において国家プロジェクトとして活動が開始され、ベースライン調査、教材開発、教員訓練、駆虫にかかわる技術支援が WACIPAC によりなされた。ベナンにおける活動においては、青年海外協力隊の活動や無償資金協力による学校建設など日本政府による他のスキームとの連携も積極的に図られている。

また、ニジェールでは 2007 年 2 月に学校保健にかかわる国家政策を策定するための国内研修が WACIPAC の支援により実施された。同研修では学校保健にかかわる他ドナーも招待され、積極的にドナー連携が図られた。また、現在 JICA ニジェール事務所はドッソ州における青年海外協力隊による学校保健促進活動との連携を模索している。

なお、本プロジェクトの支援対象国はガーナを含む 10 カ国であるが、国際研修に参加しているすべての国においてプロジェクト支援を行うことは WACIPAC の現存の能力と残りのプロジェクト期間では困難であることが確認された。このため、ガーナにおける UNICEF 支援による国家駆虫プログラムや USAID が支援する Neglected Tropical Disease Programme への WACIPAC の協力についても周辺国支援の一環として含め、合計 3 カ国において集中的に支援を継続することが現実的であると確認された。

(2) プロジェクト目標の達成度

プロジェクト目標「WACIPAC が西アフリカにおいて包括的な寄生虫対策のための人材養成機関としての役割を担う。」

学校保健による寄生虫対策のための人材養成機関として、WACIPAC は国際研修実施や周辺国支援の経験から着実に力をつけてきている。ただし、WACIPAC は国際研修において、日本や他の CIPACs の経験を活用した研修を行ってはいるものの、西アフリカ地域における学校保健による寄生虫対策のモデルを開発するには至っていない。プロジェクト目標達成のためには、残りの実施期間、財政や人材の基盤を整えるとともに、フィールドリサーチや研修の運営実施能力をさらに高めていく必要がある。

なお、指標に基づくプロジェクト目標の達成状況に関する分析結果については、合同評価報告書の 14 ページを参照されたい。



### 3-3 プロジェクトの実施プロセス

#### (1) 技術移転

国際研修による周辺国からの研修参加者への学校保健による寄生虫対策にかかわる技術移転は、研修評価報告書によれば着実に進んでいるものといえる。野口研による講師に加え、ACIPAC から招聘された講師も学校保健の考え方を研修参加者へ紹介してきた。

しかしながら、野口研のカウンターパートへの技術移転については、本邦研修や他の CIPAC による国際研修への参加はなされているものの、プロジェクト運営の側面においては十分なレベルには達していない。チーフアドバイザーの投入不足がカウンターパートへ寄り添った形でのオペレーショナルリサーチや研修サイクルマネジメントにかかわる運営技術の移転を妨げてきたといえる。また、一部のカウンターパートは日常業務が多忙でプロジェクトに十分にかかわれないことも阻害要因であった。

#### (2) プロジェクト運営

これまでプロジェクトのモニタリングは定期的な JCC やタスクフォース会議などによって実施されてきているものの、WACIPAC のプロジェクト運営そのものには問題があった。2005 年 12 月の運営指導調査団報告書や今回の調査における関係者へのインタビュー結果によれば、かつてプロジェクト関係者の間ではプロジェクトのビジョンや内容（特にモデルサイト事業）についての共通理解がなかったことが指摘されている。特に、プロジェクト開始当初の 2 年間は関係者間でのコミュニケーションも十分ではなかった。こうした問題の原因としては、国際寄生虫対策イニシアティブにおける WACIPAC の位置づけや日本側、ガーナ側双方の役割にかかわる明確な理解がなされていなかったことが考えられる。

しかしながら、プロジェクト活動が停滞するなかでも日本人専門家とカウンターパートは状況の改善に努めてきた。2005 年には 2 回の運営指導調査団がガーナへ派遣され、モデルサイト事業にかかわる認識のギャップについて議論し軌道修正を行った。その後も日本人専門家、カウンターパート双方の努力もあり、今般の中間評価調査終了までには双方のギャップの多くは埋まり、プロジェクトの今後の方向性についても共通理解を得た。

#### (3) その他

PDM 初版及び 2005 年 12 月に軽微な改訂が行われた PDM (ver.2) のいずれもが、非常に複雑で関係者のプロジェクトの理解を困難にするものであった。この問題については事前評価調査団も PDM をプロジェクト開始後速やかに明瞭なものへ改訂すべきことを指摘していたが、実際には今般の中間評価調査まで抜本的に見直されることはなかった。プロジェクトの理念を変える必要はないものの、2008 年末のプロジェクト完了時を見据え、論理的かつ合理的に PDM を明瞭化することが必要であった。こうしたことから、中間評価調査中にプロジェクト関係者による参加型ワークショップを開催し、PDM の全面改訂を行った。

## 第4章 評価結果

### 4-1 評価5項目の評価結果

#### (1) 妥当性

本プロジェクトの妥当性は現在においても高いといえる。学校保健をベースとした寄生虫対策というアプローチは、ミレニアム開発目標や人間の安全保障のコンセプトなど国際的な開発イニシアティブ及び日本の援助政策との一貫性があり、ガーナ及び周辺9カ国のニーズとも合致している。

##### 1) 日本のODA政策との整合性

プロジェクトは日本のODA政策と整合しているといえる。人材育成を通じた寄生虫対策に焦点を当て、1998年のバーミンガムサミットにおいて合意された国際寄生虫対策イニシアティブ（橋本イニシアティブ）に基づいて本プロジェクトは開始された。

また、2005年には開発途上国における保健問題への協力強化として発表された『保健と開発』に関するイニシアティブ」と、それをアフリカで実現することを目的として2006年に発表された「日本の対アフリカ感染症行動計画」も本プロジェクトの妥当性を裏書するものである。同行動計画では、日本が設立を支援したアフリカ東西の拠点〔ケニア中央医学研究所（東部）、及び、野口研（西部）〕を中心に、WHO等とも協力し、医療従事者・研究者の養成、情報交換及び国際的な研究の推進を図ること、そしてWACIPACの学校保健モデルを通じて、住血吸虫や土壌伝播寄生虫対策を推進することが明記されている。

さらに、WACIPACとACIPACとの連携は南南協力の良い事例であるとともに、上記行動計画におけるCIPAC間でのネットワークづくりにも資する活動であると評価できる。

##### 2) ガーナ及び周辺国のニーズとの整合性

ターゲットグループのニーズについても、土壌伝播寄生虫症や住血吸虫症の罹患率や患者数は地域差があるものの10カ国すべてにおいて高く、WACIPACによる同地域の学校保健に関係する人材育成は妥当といえる。また、ガーナにおけるUNICEF支援による国家駆虫計画やガーナ、ニジェール、マリ、ブルキナファソを対象としたUSAID支援による顧みられない熱帯病（Neglected Tropical Disease：NTD）プログラムといった類似プロジェクトはWACIPACと同様の寄生虫をターゲットとした面的展開を志向しており、連携が期待されている。

しかしながら、GHS及びGESとのインタビューにおいては、WACIPACはより包括的なアプローチを採るべきだとの意見があった。すなわち、日本の経験をもととした学校保健による寄生虫対策にのみ焦点を当てるのではなく、水衛生環境の改善、学校保健における社会的・精神的側面、ガーナの風習・文化についてもモデルサイト事業などで取り組むべきということである。

##### 3) 日本の比較優位性

2000年の沖縄感染症対策イニシアティブ（IDI）では、寄生虫対策における日本の経験が国際寄生虫対策イニシアティブの中で活用される必要性が強調された。第二次世界大戦後の日本における土壌伝播寄生虫感染率は国民の70%に及び、マラリア、フィラリア、住血吸虫症は風土病として日本各地に存在し、国民の健康に大きな被害をあたえていた。しかし、寄生虫対策を公衆衛生活動の一環と位置づけ、学校保健教育と集団虫卵検査と駆虫

を組み合わせた寄生虫対策を実施することによって、戦後 10 年ほどで寄生虫疾患はほぼ撲滅された。こうした経験を開発途上国に適用することは妥当である。

#### 4) カウンターパート機関選択の妥当性

研究機関である野口研は、WACIPAC が想定しているすべての機能を現時点では充足していないものの、西アフリカ地域において WACIPAC を実施する機関としては、野口研のほかにはない。他方、現在 10 カ国という関係国の数については、国際研修の対象としては妥当であるが、野口研の能力をかんがみした場合、周辺国支援の対象としては国内研修等の支援プロジェクトを開始する対象としては過剰であるといえる。

### (2) 有効性

国際研修を通じてプロジェクトは成果を上げてきている。国際研修の参加者のうち 6 カ国から WACIPAC に対して学校保健による寄生虫対策プロジェクトの提案書が提出され、実際にベナンとニジェールにおいて支援事業が始まった。しかしながら、WACIPAC の組織能力はプロジェクト目標達成のためには十分とはいえず、より一層の強化が必要である。また、PDM (ver.2) の指標は不明瞭なことから現時点でのプロジェクト目標の達成度を計測することは非常に困難である。

#### 1) プロジェクト目標の達成の見込み

プロジェクト目標の達成見込みとしては、人材育成センターとしての WACIPAC の機能は、国際研修参加者の高い満足度からみてもわかるように相当強化されてきており、プロジェクト目標の達成見込みはある。今後の課題としては、カウンターパートのフィールドリサーチや研修にかかわる能力が強化され、WACIPAC が提供する国際研修の研修モジュールが確立すれば、人材育成機関としての機能がさらに強化されると考えられる。また、対象 10 カ国のうち、ベナン、ニジェール、ガーナにおいて、国際研修参加者が実施する当該国での寄生虫対策事業及び学校保健プログラムに対する技術的支援を開始しており、成果を上げ始めており、研修後のフォロー体制も構築されつつある。

外部要因については、日本以外の財源については、特に周辺国支援を実施するにあたって非常に重要な要因であるが、プロジェクトとしてはドナー連携会議を開催することにより、他ドナーからの支援を呼びかけ、外部要因を内部化する努力を行っている。

#### 2) 促進要因と阻害要因

##### <促進要因>

- ・カウンターパート及び日本人専門家による継続的な努力がなされた。
- ・モデルサイトであるアダフォ地区のコミュニティやモデル校の人々のモチベーションが高かった。
- ・ACIPAC の専門家との効果的な連携があった。
- ・ガーナ国内の SHEP との良い関係があった。

##### <阻害要因>

- ・オペレーショナルリサーチや研修サイクルマネージメントにかかわる野口研の実施能力が不十分であった。
- ・日本側、ガーナ側双方において投入する人材に限りがあった。
- ・寄生虫対策における学校からコミュニティへのアプローチについて、関係者間の理解

に相違があった。

- ・本邦研修に参加した GHS や GES のスタッフの本プロジェクトへの関与が限定的であった。

### (3) 効率性

効率性については過去の運営上の問題をかんがみると高いとはいえない。また、各成果の達成度については、PDM (ver.2) の指標が不明瞭であったことから判定が困難な状況にあった。しかしながら、日本人専門家とカウンターパートの努力もあり効率性は改善しつつある。PDM (ver.3) で合意された各活動をスケジュール通り実施していけば、2008 年末までにはすべての成果は達成するものと予期される。

#### 1) アウトプットの達成度

当初計画やスケジュールをかんがみると、国際研修を除く各アウトプットの達成度は全体的に遅れ気味である。

#### 2) 投入のタイミング

機材については問題なく計画通りに投入され、維持管理、活用されている。しかしながら、日本人専門家については、短期専門家や ACIPAC の専門家がプロジェクトの遅れを最小化する努力を行ったものの、チーフアドバイザーの交代に伴う後任派遣が迅速にできなかったことが効率性を阻害する要因となってきた。

一方で、ガーナ側のインプットについては、カウンターパートは他業務で相当多忙な中でも WACIPAC 活動にかなり熱心に取り組んでいるものの、フルタイムのカウンターパートがいないことはプロジェクト活動を迅速に進めるうえでの制約となっている。

#### 3) コスト

モデルサイト事業における駆虫活動にかかわる費用対効果については、他ドナーによる支援のものと比較し、ほぼ同様の結果が得られている。今後、他のフィールドリサーチにおける費用対効果についても評価される必要がある。

#### 4) その他

周辺国、特にコートジボワールにおける政治的不安定は関係国への効率的移動の妨げとなっている。一例としては、ニジェールへの移動の際に日本人専門家は安全対策上、アビジャンを経由できず、パリを経由することになっており、より多くの時間とコストがかかっている。

また、周辺国支援に関する日本側の広域支援のための事前準備は必ずしも良かったとはいえない。

### (4) インパクト

これまでの活動から以下のとおり正のインパクトが確認された。なお、負のインパクトについては、これまでのところ確認されていない。

#### 1) ガーナ国内におけるインパクト

ガーナ国家駆虫プログラムの開始にあたって学校保健教育プログラム (SHEP) から WACIPAC に対してプログラム実施にかかる技術支援の依頼があり、WACIPAC からは教師研修教材作成にかかる技術的な支援、ステークホルダー会議開催支援、WACIPAC モデル

サイトにおける研修手法の提示、全国の教師研修への講師派遣等の支援を実施してきた。このことは、WACIPAC がガーナ国内においてリソースセンターとして認知されている証である。さらに、2007年4月から開始予定のNTDプログラムに関してもWACIPACは技術支援団体となる予定である。

## 2) 周辺国におけるインパクト

2004年のポリシーメーカーワークショップに参加したベナンの研究者が、学校保健を通じた寄生虫対策にかかる重要性を認識し、その後保健大臣になっている。同大臣のイニシアティブにより、2006年には学校保健政策ペーパーが策定されている。

## (5) 自立発展性

自立発展性を確保するため、プロジェクトは一層の組織制度面、技術面での能力強化が必要である。

### 1) プロジェクト持続のための政策・システム

野口研はWACIPACを西アフリカにおける寄生虫対策のための人材開発拠点と認識しており、フィラリア研究センターと統合した形でガーナ大学の一機関として正式に組織化することを検討している。

### 2) 組織・財政

組織・財政面ともにWACIPACの能力は不十分である。プロジェクト完了後、独自予算でオペレーショナルリサーチや国際研修を行うことは現時点では困難と考えられる。WACIPACの組織化が実現すれば、予算、人員ともに正式に確保されることになり自立発展への大きな一歩となる。しかしながら、WACIPACの本来機能を果たすために十分な予算や人員が確保できるか否かは現時点では不明であり、今後も注視していく必要がある。

### 3) カウンターパートに移転された技術の定着度

技術面においては、国際研修では研修受講者から高い満足度を得られる内容を提供しており、野口研の講師としての高い技術力が認められる。しかしながら、コース運営のロジスティックスにかかる体制はWACIPACプロジェクト事務局が実施している状況であるため、野口研の事務局からの関与が必要である。また、WACIPACによるオペレーショナルリサーチ実施能力についても現時点では限定的といわざるを得ない。

## 4-2 結論

プロジェクトは、過去に運営上困難な状況に直面したこともあったが、適切な軌道修正の努力も行われてきた。日本側、ガーナ側双方がWACIPACの将来像（西アフリカ地域における学校保健による寄生虫対策の人材育成拠点）を共有し、残りの実施期間、人材を含む適切な資源を活動に投入することができれば、プロジェクト目標は達成されることが予測される。

## 第5章 提言と教訓

### 5-1 提言

- (1) 2008年6月の終了時評価を見据え、今回改訂されたPDM(ver.3)に基づいて適切なモニタリングを実施する必要がある。
- (2) 現在は、WACIPACにフルタイムのカウンターパートが存在しない状況であるため、WACIPACの活動を継続して行うために必要な数のカウンターパートを配置するための一層の努力が必要となる。
- (3) WACIPACの自立発展性確保のためにも、WACIPACがガーナ大学の一機関として早期に承認されることが期待される。
- (4) モデルサイト活動は実証可能な科学的な研究計画に基づいたフィールドリサーチとして実施されるべきである。
- (5) 支援対象国において出てきている有益な成果については、グッドプラクティスとしてまとめることが期待される。

### 5-2 教訓

- (1) WACIPACの展望や役割・責任について、日本側、ガーナ側双方における明確な理解が不十分だったことがプロジェクト運営上の問題の原因として考えられる。こうした問題が生じた際には迅速に適切な対応がなされるべきである。
- (2) WACIPACとACIPACとの連携は南南協力の有効性を証明した。
- (3) WACIPACによる支援対象国でのドナー協調や政策的枠組みの策定支援は、学校保健をもととした寄生虫対策が有効であることを示した。
- (4) ガーナ周辺国への協力を可能にするためには、事務手続きや実施体制の整備を前もって行う必要がある。

## 第6章 団長所感（竹内団長）

いわゆる橋本イニシアティブに基づく、わが国の国際寄生虫対策にかかる人材育成計画（Center of International Parasite Control program）を構成する3か所の拠点のうち、2008年に終了を迎える国際寄生虫対策西アフリカセンター（WACIPAC）の中間評価に参加したので、以下に総括的な所感を述べる。

本計画はガーナ大学の野口記念医学研究所（NMIMR）をカウンターパートとして2004年から開始された。本来は2006年に中間評価を迎えるべきところ、日本側チーフアドバイザーの早期帰国などの状況が重なり、2007年2月まで調査団派遣が延期された。

今回の調査において、大きなメリットであったのは、タイ派遣の小林専門家とJICA 瀧本職員が本体出発の約1週間前から現地入りし、種々の調整を図ってくれたことで、その後のカウンターパートとの打ち合わせが、当初想定されたより順調に推移したことをまず記しておきたい。

今次中間評価については大きな懸案事項が幾つかあったが、そのうち最も大きなものはプロジェクトのマネージメントの問題、モデルサイトにおける活動内容と、それに対する経費負担の問題、及びPDM改訂にかかる問題であった。

プロジェクトのマネージメントの問題は、日本側に起因するところもかなり存在するのは事実であり、カウンターパートの問題ではない部分もあるものの、主要な活動のうちモデルサイトでの活動のコントロールができなかったことはガーナ側にも併せて問題がある。本来のプロジェクトの目的に沿ったモデルサイトの活動に限定して実施するべきであるが、本質的には以前と変わっていないという印象をもった。今後の新しいチーフアドバイザーに負わねばならない点であろう。また、モデルサイトにおいて科学的合理性をもったアプローチを植えつけるため、幾つかのフィールドリサーチという起承転結を明確にセットしなければならない方式を導入しようとした。今後の投入のサイズ、内容の検討とともにリサーチ実施の推移を慎重に見守る必要がある。

PDM改訂は事前の小林、瀧本両氏の調整によって、思ったよりスムーズに推移したものと考えられる。しかし、微妙な点で議論を要したところもあり、今後留意すべきところを残していると思われる。

WACIPAC が公式にガーナ大学の組織として認証されるべき必要性は、以前よりも増加している。予算措置、人的リソース配置も現段階では十分とはいえず、今後継続してガーナ側と交渉を続ける必要がある。

国内外におけるパイロットプロジェクトうち、特にニジェール、ベナンにおけるものは今後の発展にそれなりに期待を抱かせるものであった。JICAのそれぞれの現地関係者の理解と積極的な関与をお願いしたい。

## 付 属 資 料

1. 中間評価調査協議議事録 (M/M) (合同評価レポート付)
2. 評価グリッド
3. モデル活動評価報告書 (2005 年 12 月作成)



1. 中間評価調査協議議事録 (M/M) (合同評価レポート付)


**Minutes of Meetings**  
**between**  
**The Japanese Mid-term Evaluation Study Team**  
**and**  
**Noguchi Memorial Institute for Medical Research**  
**University of Ghana**  
**on**  
**Japanese Technical Cooperation for**  
**West African Centre for International Parasite Control Project**

The Japanese Mid-term Evaluation Study Team (hereinafter referred to as “the Team”) organized by the Japan International Cooperation Agency (hereinafter referred to as “JICA”) and headed by Prof. Tsutomu Takeuchi visited the Republic of Ghana from February 15 to March 3, 2007, for the purpose of reviewing the activities of the Japanese Technical Cooperation for the West African Centre for International Parasite Control (WACIPAC) (hereinafter referred to as “the Project”).

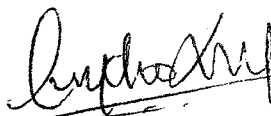
During the stay, the Team exchanged views and had a series of discussions with the Ghanaian authorities concerned with the Project.

As a result, both Japanese and Ghanaian sides agreed upon the issues referred to in the document attached hereto.

Accra, March 1, 2007



Prof. Tsutomu Takeuchi  
Leader,  
Mid-term Evaluation Study Team,  
Japan International Cooperation Agency,  
JAPAN



Prof. Alexander Nyarko  
Director,  
Noguchi Memorial Institute for Medical Research,  
University of Ghana,  
REPUBLIC OF GHANA

27

AKN

ATTACHED DOCUMENT

**I. Introduction**

JICA dispatched the Mid-term Evaluation Study Team, headed by Prof. Tsutomu Takeuchi to Ghana from February 15 to March 3, 2007 in order to evaluate the activities and achievement of the Project.

As a result of a series of the discussions with organizations concerned and the meetings with officials of Noguchi Memorial Institute for Medical Research(hereinafter referred to as "NMIMR"), both Japanese and Ghanaian sides reviewed the activities of the Project and made a Joint Evaluation Report as ANNEX 1. Also, both sides agreed on the direction for the remaining period of the Project as described in this document.

**II. Conclusion**

The Project had faced difficulties in its management. However, appropriate efforts have been made to modify project activities.

It would be expected to achieve the project purpose, if both Japanese and Ghanaian sides share common vision of WACIPAC in the future and create necessary condition to allocate appropriate resources especially in human resources into the project activities for the remaining period.

Both sides reconfirmed that the crucial role of WACIPAC, as a centre of excellence for school health based intervention for parasite control, is to build human capacity in the West African sub-region.

**III. Activities in the remaining period of the Project**

Through careful studies and discussions, both sides agreed on direction of activities in the remaining period of the Project "3.1 and 3.4". Also, budget allocation to each output is to be aligned to what was agreed in Minutes of Meeting signed in December, 2005(i.e., overall expenses for the model site activities should be less than 7% of all expenses for the Project activities).

**3.1 Model site activities**

Both sides agreed that it is important to verify the effectiveness and efficacy of model site activities with scientific evidence. The Project is not to implement interventions, but to focus on monitoring and evaluation of intervention done by other implementing agencies such as local governments and community organizations.

**(1)Field Research**

Both sides agreed on the three research components stated below. Research proposals

T-7

ajcn

including budgetary plan are to be submitted to the review committee, members of which are Project manager, WACIPAC staff, chief advisor (acting chief advisor) and other Japanese experts before the middle of May 2007, to be agreed by both sides then to be passed through NMIMR procedures for approval and ethical clearance. Specific Ghanaian counterpart should be allocated to supervise each research conducted. For item c), it should be discussed if studies on disease cycle and timing for drug administration are included in the proposal.

In addition, routine activities such as ToT for teachers can be revised based on the field research.

- a) Evaluation of efficacy of linkage between school health based approach and community based approach
- b) Evaluation of efficacy of malaria education from school to community.
- c) Evaluation of cure rate of mebendazole and praziquantel

#### (2)Funding mechanism

Both sides agreed that JICA support is limited to monitoring and evaluation of the field research stated above, and expenses for implementation of intervention should be excluded and also community organizations cannot be funded. But all the expenses for conducting research b) above will be supported through research fund from Dr. Jun Kobayashi.

In response to Ghanaian request, Japanese side agreed that the Project may provide post graduate students with transportation, per diem and accommodation in assisting the field research if their research proposal is prepared with names of students involved and Ghanaian counterpart as a supervisor and estimated days of field research trip etc and agreed by the review committee. Post graduate students involved in the research are to make presentations at seminars and publications about outcome of the research.

#### 3.2 International Training Course

Both sides agreed on following issues concerning International Training Course.

- (1) Theme of international training course should focus on school health based intervention for parasite control, in connection with Neglected Tropical Disease programmes.
- (2) International training course targets all the member countries.
- (3) Collaboration with ACIPAC and ESACIPAC is to be enhanced during international training.
- (4) Visits to one or two countries as follow-up of international training would be conducted.
- (5) A policy-maker workshop is to be planned in 2008 to share future vision of WACIPAC and to ensure its sustainability of WACIPAC with member countries.

T. T.

ckn

### 3.3 Information Network

Both sides agreed to continue distribute newsletters, to update WACIPAC website and to develop e-mail communication group. Also, achievements by the Project could be put on the website such as result of the field research. As Japanese side pointed out it is important to allocate appropriate counterpart in charge of information network, Ghanaian side is to make a maximum effort for WACIPAC to be officially established as a Centre in the University of Ghana.

### 3.4 Technical assistance to member countries

#### (1)Ghana

Ghanaian side proposed to conduct following activities as technical assistance to MoH and MoE of Ghana by WACIPAC.

- a) Technical support through facilitation of ToT for National de-worming programme (i.e. provision of transportation to convey WACIPAC facilitators, payment of per diem and accommodation for WACIPAC staff)
- b) Development of self-assessment sheet for Health Promoting School
- c) GIS based monitoring and surveillance

Japanese side supported basic idea of these three activities, but for b) above, Japanese side stressed that WACIPAC should clarify how WACIPAC can coordinates with MoE and DANIDA. Also, for c) above, WACIPAC should discuss with appropriate authorities of MoH (i.e. disease control and health research unit) to clearly define where WACIPAC can support. Then, Ghanaian counterpart should make a proposal with a plan of necessary budget and counterpart allocation to the Project for further discussion.

#### (2)Benin

WACIPAC supports Benin to implement "Start-up Project" through ToT for de-worming and health education etc in Dangbo district. Both sides agreed that WACIPAC continues to support Benin, as one of the leading cases, for conducting ToT in regional level and for promoting donor collaboration in the 2007 JFY, but it is the responsibility of Benin government to scale-up on-going activities as a national programme. This should be addressed during the donor coordination meeting planned in March 2007. Also, WACIPAC is expected to contribute to form a consensus on the collaborative plan with the Benin government and other stakeholders including JICA Benin office.

#### (3)Niger

Considering the request submitted by the Ministry of Basic Education and Literacy of Niger,

both sides agreed that WACIPAC would technically support Niger a) to develop and make a trial on self-assessment sheet for Health Promoting School which was introduced by WACIPAC's international training course in 2006 and b) to strengthen donor collaboration for harmonization of the current school health activities. Detailed plan would be discussed between Niger government, JICA Niger office and WACIPAC.

(4) Other countries

Both sides agreed that WACIPAC supports seven member countries other than Ghana, Benin and Niger through international trainings and policy maker workshops, and conduct visits to one or two countries per year as follow-up of international training.

#### IV. Recommendations

In order to strengthen capacity of WACIPAC as a centre for human resource development in the West Africa for effective control of parasitic diseases, and to achieve the project objective by the end of the Project, the Evaluation Team recommended that:

##### 4.1 Monitoring the project using PDM

It is necessary to conduct monitoring of the overall project with the PDM version 3(attached) being conscious of terminal evaluation to be expected approximately in June 2008.

##### 4.2 Assignment of counterpart staffs

The WACIPAC counterpart staff are drawn from the participating departments in the University of Ghana and they contribute percentage of time to the project activities in accordance with the university rules and regulations. As for field research in the model site, Japanese and Ghanaian sides agreed to mobilize postgraduate students to support conducting it. However, efforts should be made for sufficient number of counterpart staffs to implement and sustain activities of WACIPAC.

##### 4.3 Authorization of WACIPAC as a Centre of University of Ghana

Considering limited activities of WACIPAC, its prompt authorization is strongly needed.

##### 4.4 Field research with scientific evidence

The model project site activities should be implemented as field research based on scientific research protocol.

##### 4.5 Good practices in the supporting countries

The Project is making significant progress in the supporting countries. Those results should be compiled as good practices.

T. T.

afn

**V. Modification of PDM**

Both sides agreed to modify the Project Design Matrix (PDM) and developed PDM Ver.3 attached in ANNEX 1 according to the changing environment and the progress of the Project.

Through the process of modifying PDM, target countries of WACIPAC were classified into "Member countries" and "Supporting countries" based on forms of capacity building offered by the Centre. "Member countries" are all ten countries which international training of WACIPAC targets. "Supporting countries" are countries which WACIPAC gives further technical assistance to implement activities such as in-country training. Current supporting countries are Ghana, Benin and Niger.

APPNEDIX Joint Mid-term Evaluation Report on the Project for the West African Centre for Parasite Control

T.T.

AKM